

母の留守

「もう何時かしら、あらもう十二時だわ！」

さう言つて艶ちゃんは、膝の上に擴げてゐたメレンスの三つ身ものを搔いやって、くると火鉢の方を向いて手を翳した。少し荒れの見える、すらりとした十本の指が斜めに揃ふ。

もう十二時だわといふ言葉の意味は、お晝飯の仕度をしなければならぬといふ事なのだけれど、併し私はまだ起きたばかりであつた。少くも今し方朝飯をすましたばかりなのであつた。

「私、今日はお晝飯を戴かないわ、だつて今、朝の御飯がすんだばかりなんだから。」
さう言つて私は自分の朝寝を笑ひながら、立ちさうにしてゐるお艶ちゃんをとめた。

「さう、ぢや私も止さう。」

艶ちゃんは早速同意をしてしまった、小母さんなら、假令さう思つても「でも。」とか何とか言ふところなのだけれど、人の言葉も自然に受入れてすましてゐる率直さが、私は可笑しくもあれば可愛いやうな氣もして思はず微笑ませられた。

私と艶ちゃんとは長火鉢を挟んで向ひ合つた。

「姉さんお裁縫好き？」

「いゝえ。」と、私は突然の質問に再び微笑みながら艶ちゃんを見返した。

「私も大嫌ひ。」

「さう？　だつてよくなさるぢやありませんか。」と、私は不思議さうに、毎日毎日母親の前に坐つて殊勝げに縫物を手傳つてゐる、此娘の静かな姿を思ひ浮べながら言つた。

「えゝ、だつて怠けると母さんに叱られるから、でもほんたうに私嫌ひなのよ。」

艶ちゃんのものごしには、この位の年頃の娘にありがちな表情は一つもなかつた。いつも静かで平らかで、そして落着いてゐた。顔も美しいけれど、其割には、つまり不均整な顔の持主が持つてゐる程の魅力もなく、といつて別に寂しい顔立でもないけれど、又、パツと燃えるやうな事は絶対になかつた。さうかといつてそんなに冷たい感じも與へないし、相當に人懐っこく、そして第一によく氣のつく性質であつた。私は時々此娘を自分よりは遙かに世馴れた女として見上げたり、又ほんの子供らしい考へや言葉によつて、思はず小母さんと顔を見合せて、

「まだ子供ねえ！」といつて笑つたりする事がよくあつた。

艶ちゃんは今度とって確か數へ年の二十になつたのだと思ふ。自分ではもう一角ひとかどの人に
なつた積りであるけれど、何かにつけて時々その一人前の女の中から十六七の小娘が顔を
出して世間を覗く、けれども私はそれが好きであつた。

「少女よ、何もそんなに急いで大人となるには及ばない。自然を偽らぬ程度に於て、あな
た達なるべく長く子供でいらつしやいよ！」といつてやりたいやうな氣がするのであつた。
さうしてつい此間まで自分が吸つてゐた其時代の空氣を客觀しつゝも、一方に懐しみ、又
一方に同感し得らるゝのであつた。

「私、今日はもう止さうや、母さんも衿えりだけつけりやいゝて言つたんだから。」

艶ちゃんは仕事の方を振向いたまゝ再び手に取らうともしないで、

「姉さん聞かして上げませうか……」といきなり立上つて押入から例の樂器を取り出して
來た。

例の樂器とは艶ちゃんの手製の琴で、二尺足らずの板切れに錐きりで穴をあけ、それに絃いとを
通して柱には玩具おもちゃの將棋の駒をたてた簡単な樂器であつた。それでも爪で搔きならすと憚
つたやうな優しい音ねをたてゝ、どこか遠くで弾ひく音ねを漏れ聞くやうな調子をたてるのであ
つた。ほんとに琴が買へるまでの手馴しにといつて、艶ちゃんが一日がゝりで一生懸命に
なつて作つたものであるさうな。

「六段をやりませうか。」と、艶ちゃんは其原始的な樂器を膝の上に乗せて、暫く調べを合
せるのだった。

つゝましやかな絃いとの音ねは、餘韻よゐんにこそ乏しいけれど、巧みな手先に奏かなでられて行つた。
それに合せて小聲に歌ふ艶ちゃんの唇が、軽く觸れたり離れたりして、紅く可愛く働いた。

いつも午後から差しかける日が、そろそろと障子越しに茶の間を覗きかけてゐた。一つ
二つ花をつけた梅の枝が、いつの間にか影絵のやうに手をのばして映つてゐる。さうして
障子が日に照らされると共に、何處やら陰のあつた部屋の中も明るくなつて來た。

私は火鉢の縁に頬杖をついて、餘念なく、何の苦勞もなさゝうに、玩具おもちゃの琴を弾いて歌
つてゐる艶ちゃんの横顔を眺めながら、この人についてのいろんな事に思ふひ耽ふつてゐた。

艶ちゃんは私を姉さん姉さんとこそ呼んでゐるけれど、つい二た月ばかり前まではお互
に顔も名も見知らぬ間柄なのであつた。私の直接知らぬ知人の知人が、この母娘おやこが息子と
も兄とも頼りにしてゐる人の友達だったので、何處か暖かな處ところに冬を避けたいといつてゐ
た私の願ひは、まことに都合よく實現される事になつた。鎌倉の長谷の大佛に近い三間ば
かりの家に、母娘は今つましく暮しをたてゝゐる。看板こそ懸かけないけれど、傳手つてを求め

てお仕立物をやつてゐるのである。尤もこれは當分の間の隠れ家で、頻りに頼りにしてゐる人の南洋から歸るまでのたつきであるらしい。兎も角にも母娘は其時を一日千秋の思ひで待ち、又其時こそ自分達の新しい生涯が開けて来るやうに思ひ込んでゐるのだから。

小母さんは養子を迎へた身であつた。そして相當に有福に暮して來た事は、二人の折々の話にも窺はれるし、艶ちゃんが子供の時分の、これは踊りのおさらひの時の着物だったなぞといふ友禪の初端などにも、昔の榮華が影を残してゐるけれども、養子はやがて放埒を初めた。そして長い間妻子を打ちやらかして家を外に遊んで歩いた爲め、店も閉めなければならぬやうになり、小母さんからは愛想を盡かされて、離縁話が持上る、その擦つた揉んだの中に失踪したまゝ、養子は——といつてももう五十近い男だけれど——今だに行衛不明の人となつてゐる。

利かぬ氣の小母さんは、それからは異常に興奮した覺悟の下に、兎も角人手を借りずに艶ちゃんを育てゝ來た。艶ちゃんは養女であるけれども、總ての愛や希望の結びつく唯一つのもの、又は總ての感情の唯一つの漏らし所である爲めに、小母さんに取つて艶ちゃんは眞に可愛い者でもあれば、又無くてはならぬ者でもあつた。又艶ちゃんの方でも、一人前にならぬ者の此世に於ける唯一の保護者として、小母さんを頼り親しんでゐる。

「厭な母さん、ほんとに厭な母さん！　ね、いゝでせうてば　さうしても？」

「知らないよ、私は知らないよ。」

などゝ内心北叟笑みながら焦らしたり、又精一つばいに甘へたりしてゐるところなどを見ると、私はせめてもの母娘の其平和な境に、はだから袖屏風をして圍つてやりたいやうな微笑ましさを覺えるのであつた。

「あら、もう母さんが歸つて來たわ！」と突然艶ちゃんは首をあげて言った。

成程こちらに向いて來る下駄の音がするやうだけれど、しかしどうしてそれが小母さんのに限つてゐるのだらう？

「母さんの下駄の音がわかるの？」

「えゝ、よくわかるわ。」

併しさう言つてゐるうちに、下駄の音は縁の前を通り越して、一軒先の家の潜りが開いた。

「あら大變、あんな母さんだったら大變だ。」と艶ちゃんは障子の穴から表を覗いて、口八ヶましい其家の内儀さんが通るのを見ながら言った。

私は又笑ひ出した。小母さんはやつぱり無二の者として、頻りに母を待つ娘心が、いちらしいやうな嬉しい氣がしたのである。

さうだ、娘であるうちは何處までも娘らしく振舞つたがよい！

「いったい小母さん何處までいらしたの？」

「小町まで。藝者屋よ、着物を持って行つたんですの、いつも私ばかりやられるんですけど、今日は母さん銀行に用があるんですつて。」

さう言つてから艶ちゃんは不意と思ひ出したやうに、

「姉さん、あの床の間んとこにある管の中御覽になりたい？」

「えゝ、見せて頂戴な。」と私は好奇心をそゝられながら言つた。

私は此家に来て最初に目についたのは、床の間の竹筒に葉蘭が生けてあつたのと、それから其隅の方に飾つてある綺麗な小管とであつた。丈は六七寸位の、一つある引出しの上は観音開きになつてゐて、開きには一寸した蒔繪があり、引出しの表や其他のぐるりは金梨地に塗つてあつた。そして其管の上に、木彫りの立姿の達磨がちよこんと乗つてゐた。

「あの管の中には何がはひつてるのだらう？」と私はよく思ひ思ひした。そして或時何氣なく聞いて見たら、小母さんと艶ちゃんとは顔を見合せて、

「何でもありやしませんよ。大變大事なもんですからね。」と言つて、たゞ笑つてゐた。

それから私は、多分何か大切なものが藏つてあるのだらう、恐らくは何か秘密に近い大切なものが……とひとりぎめして、なるべく其管に近寄らないやうにしてゐた。それなのに艶ちゃんは今それを見せようといふのである。

「姉さん何がはひつてると思ひになつて？」

と其小管を抱へて來た艶ちゃんは私の前に坐りながら言つた。

「さあ！ なんだか解らないわ。」

私は實際何とも見當がつかなくかつた。

「なあんでもないのよ、私のおもちや！」

艶ちゃんの小管を膝の上に乗せてカチカチと錠を開けた。開きをひらくと中は三段になつた玩具の箆筒であつた。其中の一つには、豆のやうなお芥子の人形が、七子の紋附に仙臺平の袴をはいて、小さな籠の中に寝せられてあつた。

「まあ！」

私は思はず呟いた。意外なことは全く意外だつたけれど、併し考へてみれば別に不思議はないのだ。自分のあらゆる持物の中で、玩具が一番大事なうちの尊さよ！ さうしてそれから、美しい着物と帶と、猶其外に人形を手離すに忍びぬ時代の懐しさよ！

「この人はね、そりあ着物持なのよ、ほら、こんなに着替へがあるでせう。」

艶ちゃんはも一つの引出しを私の手に渡した。それには空色縮緬の着物だの、縞物だの、改良服だの、さてはお祭りの粧よそはひの立つけや花笠などまで揃そろへられてあつた。

「いゝえ、お祖母さんが縫ぬってくれたの……あの時分は私幸福しあはせだつたのよ、どんな事でもして貰もらへたわ……もつとどつさりいろんなものがあつただけけれど、母さんがもうそんなもの持つてちゃいけないっていふから、みんな親類の子にやつちやつたわ、今考かんへると惜おしい！」

艶ちゃんは私の笑顔を見て自分も笑つた。苦勞といふものゝ寄りつけない、幸福な笑ひである。

私はふと、これがあの此間あんな事を小母さんに言つた人と同じ艶ちゃんであらうかと彼れ是れ思ひ出さない譯には行かなかつた。

此間中、一週間ばかりの間といふもの、母娘おやこは何となく暗い顔をして、艶ちゃんなどは御飯もろくろく頂かない位であつた。二人の頼りに思つてゐる人が、南洋に永住するかも知れないと言つて來た手紙の結果である事は後に解つたが、とにかく母娘おやこには何か思ひに餘る事があるらしかつた。それから二三日過ぎて、小母さんは艶ちゃんのゐない時にそつと私に話して呉れた。いつも仕立物を持つて行く藝者屋おかみの女將おかみが艶ちゃんにいふのには、新橋とかにある自分の親戚の家にお嫁に行かないか、其處はしもたやで財産もあり、先方は一人息子だし、それに母親一人位連れて來てもいゝのだからといふのださうである。

「あの子も初めはてんで對手あひてにしませんでしたけどもね、南洋からはあんな事を言つてくるし、あれでもやつぱりいろんな事を考へると見えて、どうせこんなにも何も無い所には、こつちで望むやうな者で養子に來てくれないだらうし、さればといつて私やつぱり鑿のみや鉤かんなをいぢくるやうな人では厭いやだつていふのですよ。それでね、いっそ親を引取つてやるといふのだから、さういふに向ふで望む所に嫁よめつてくれないかといふのですよ。もう私は先がどんな人だつて、母さんの面倒さへ見て貰へるならどんなだつて我慢するつて、貴女さういふのですよ、あれでも親を背負はなきやならないと思ひ込んでるのかと思ふと可哀さうですよ。」と小母さんもしんみりとしてゐた。

その艶ちゃんが今かうしてこゝに幸福さうに人形もてあそを弄もんでゐる。

「ねえ貴女、お艶を買物にやるには餘計なお錢かねは持たせられないんですからねえ、さうでないと何時の間にか玩具おもちゃなぞを買込んでゐるんですからねえ！」と言つた小母さんの言葉が思ひ出される。

まさかと其時は笑つてゐたけれど、併し今は決してそれが不思議とも不自然とも思はな

い。それでいゝではないか、この人から玩具おもちゃを取上げる時が来たならば、それは取上げるものがそれを取上げてくれるだらう。

「あ、今度こそ母さんよ！」と艶ちゃんは慌てゝひろげたものをしまひにかゝつた。

朱塗りの爪箱つめばこだの櫛かんざしだの、小さな達磨や福助や、さては蒔繪まきゑの盥たらひや櫛箱くしばこといったやうなものが、艶ちゃんの指先を離れて、或はこれが最後かも知れずに、再びもとの棲家すみかへと、小さな引出しの中に隠れて行つた。

【入力者注】 以下の修正を行いました。

揉もんんだ ↓ 揉もんだ

朱塗しゅぬりり ↓ 朱塗しゅぬり

底本…「水野仙子全集」第四卷

初出…「女子文藝」大正七年三月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成三十年一月十九日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)